

語り合うことが難しい
現代の高校生の日常

編集長 先生方には2012年12月

に行われた2日間の「高校生未来プロジェクト（以下、PJ）」と、3か月後の高校生座談会の様子（P.10）をご覧くださいました。まずはその感想からうかがいます。

前田 PJを見学して印象的だったのは、高校生が「なぜ学ぶのか、自分はどう生きるのか」といったテーマで語り合うことに実はとても飢えていたということです。そして、PJから数か月が経った今もとても生き生きとしている様子を見て、語り合うという行為による生徒の変化、

学びの意味を模索する生徒に 私たちはどう向き合うのか

「学びの意味」「勉強・学問と社会のつながり」について悩みながらも考えようとする高校生の姿に、高校教師は何を感じたのか。「高校生未来プロジェクト」に企画段階から参加したオックスフォード大教授の荻谷剛彦先生と語り合う。

成長の大きさに驚きました。

竹歳 PJ当日、あるグループの生徒が、「うちの学校の先生は進路の話といえば、どの高校からは東京大に何人合格したといった話ばかりしている」と話していました。私は、授業やLHRなどで、生きること、学ぶことの意味について自分の考えを話さず、生徒にも考える機会を与えない教師がいることを知ってとても驚きました。生徒には教科科学力だけでなく、知識の受け皿として豊かな人間性も必要なのに、それを育てようとしていない教師がいることにショックを受けました。

荻谷 そうした中で、このようなPJが行われ、子どもたちの確かな変

容を見られたことは、大きな価値があったと思います。東日本大震災は、社会や人々の意識を大きく変える出来事でした。「知」の意味が問い直される中、「社会貢献と学び」は極めて重要なテーマですし、高校生と2日間接し、日本にはまだまだ秘めた力があると可能性を感じました。その上で、生徒たちの話を聞いて感じたのは、今の子どもたちは、自分を開示できない人間関係の中にがんじがらめになっているのだということです。それは教師との関係においてよりも、私は生徒同士の関係においての方が気になりました。今回の座談会でも、「進路の話題などについては触れてはいけないという



「暗黙の了解が日常にはある」という生徒の発言がありました。つまり、自分の生き方について話してもよいのは、今回のPJのような非日常の場なのです。子どもたちが生き方を考え、語り合う学校という日常の場がこわばってしまっていることを大人たちは強く意識し、打開を試みない限り、この状況がずっと続いていくこととなります。

語り合いの中で表れた 他者に貢献する意識

前田 クラス担任を務めると、今の



苅谷剛彦

かりや・たけひこ

東京大大学院教育学研究科教授を経て、2008年度より、オックスフォード大教授。専門は教育社会学、比較社会学。主な著書に、「学力と階層 教育の縮びをどう修正するか」（朝日新聞出版）など。

高校生にとって、自分はどう生きるかといったテーマは、とてもデリケートな話題なのだ実感します。だから正直に言うと、それを話していくい雰囲気をあえて壊そうという積極的な意識は私にはありませんでした。ただ、今回のPJで生徒たちが自分をさらけ出し、そして語り合う中で「相手の熱意をもらって自分も変わる気がした」と成長していく様子を見ると、自分たち教師が彼らの中の変わりたいという意欲を引き出すことがもつと必要なのだと思います。



竹歳真一

たけとし・しんいち

教職歴22年。鳥取県立倉吉東高校、鳥取県立倉吉総合産業高校などを経て、2013年度よりマレーシアのマラヤ大予備教育学部日本留学特別コースに日本政務派遣教師として勤務。担当教科は数学。

苅谷 もしかすると、今回のPJで社会や生きることについて他者と語り合い、共に考える経験をした生徒は、閉塞した日常に戻った時に悩み、苦しむことがあるかもしれません。それは高校教育だけの問題ではなく、高校が生徒にとって自分を語り、他の人の生き方から学ぶ場になっただけでも、日本の社会は特別困ったことにはならないという、そのこと自体が大きな問題だと思います。深く考え語り合うこともない人間をつくったほうが社会にとって都合がよく、それでもこれまでの日



前田幸男

まえた・ゆきお

教職歴14年。鳥取県立鳥取東高校、鳥取県立倉吉西高校を経て、2005年度より鳥取県立鳥取中央英高校に勤務。進路指導部所属。担当教科は数学。

本はなんとかやってこれたのです。しかし、これからもそのままでは、社会が緩やかな衰退をたどっていくようにしか私には見えません。今回のPJに参加し、語り合う生徒たちを見ると、彼らは学校や社会の現状に無意識に疑問を感じていて、それが語り合うことへの「飢え」として表れたのではないかと思います。
竹歳 私は、教師として、そうした状況は変えたいと思います。私自身、生徒に対して一人の人間として、怒りや喜びをあらわにしてぶつかってきました。まずは教師が本音で社会に対する考えを語り、教師同士でも議論すれば、それが生徒にも伝わっていくのだと思います。
編集長 生徒と生徒、そして生徒と教師という関係で、考えを伝え合い、喜怒哀楽を感じる場面もあってよいということでしょう。「自



小泉和義

こいずみ・かずよし
『VIEW21』編集長



「自分とは違う考えを持つ他者と
生き方を語り合うことで、
生徒の内面に変わりたいという強いエネルギーが生まれていた」
前田

分が話した時に目を見て聴いてくれ
たから、うなずきながら聴いてくれ
たから、自分も真剣に聴こうと思っ
た」「この人たちなら、違う意見を
言っても受け止めてくれるのではな
いかと信頼できたし、自分も受け止
めようと思った」と生徒たちは話し
ていました。今回のPJは「社会貢
献」がキーワードの1つでしたが、
自分の心をさらけ出して語り合うこ
とで、相手のための自分であろうと
する姿勢になっていったのは、社会
貢献意識の表れだと思いました。

前田 自分とは違う考えを持つ他者
と生き方を語り合うことで、生徒の
内面に変わりたいという強いエネル
ギーが生まれ、「一度も話をしたこ
とがなかったクラスメートに話し掛
けた」「授業を聞かないクラスメー
トに何かしたいと思った」など、自
分はこうありたいという具体的なモ
デルを生徒は構築していました。そ
のことが分かった以上、学校では今
まで通りの関係でよいとは言えませ
ん。



「子どもたちの日常がこわばってしまっていることを、
大人たちは強く意識し、
打開を試みない限り、この状況は続いていく」
菊谷

と嘆くだけでは何も変わりません。
今回のPJのように、自分の学びと
社会との関連性を考えながら、高校
生が語り合う場を積み上げていくこ
とは大きな意味を持ちます。

日常のかかわりの中で 生徒の意識を大きく広げる

編集長 とはいえ、PJの内容を、
そのまま学校の日常に移行しようと
いうのは現実的ではないでしょう。
日常の全てを変えるのではなく、学
校行事や「総合的な学習の時間」、
あるいは授業の一部などで意図的に
非日常の場をつくっていくのは1つ
の方法だと思います。その際、もっ
と積極的に学校外の組織と連携する
ことも必要ではないでしょうか。

菊谷 教師個人が持っている枠組み
で理解する生徒と、外部の人間の感
性で理解できる生徒は同じではない
でしょう。教師が全てを背負うので
はなく、外部の力も活用して、複数
の視点で生徒を育てていく意識を持
つことは私も大切だと思います。

竹歳 ただ、外部の力をどのように
生かすのが重要ですね。PJ当
日、「学校で職業人の講演会などが
あっても、寝ている生徒が多い」と
話していた生徒がいましたが、それ
は学校が悪い意味で外部に全てを委
ねてしまい、その取り組みの価値を
生徒に事前に説明できていないから
です。ゲストの話から何を学んでほ
しいのか、教師が自分の言葉で説明
できるかどうか、生徒に考えてほし
いことを提示できるかどうかで、そ
のイベントに魂が込められ、生徒の
アンテナも高くなるのだと思いま
す。

編集長 それは日常の指導にも通じ

るお話ですよ。授業やLHRなどの日々の指導の中で生徒が変わっていくきっかけをつくるために、どんなことを大切にしていますか。

竹歳 「自分の話を聞いてくれるから自分も聴こうと思った」と話す生徒がいましたが、それは教師と生徒との日常の関係でも同じです。教師が生徒に関心を持ち、その生徒の変化の瞬間を捉えて褒めてやるこゝとが出来れば、生徒はその教師の言葉に耳を傾けます。たとえ大きな成長でなくても、その生徒がもがいているからこそその変化であれば、それを的確に捉えてすぐに声を掛ける。他の生徒の前で褒めたり、声を掛けたりすれば、生徒同士の目が向き合い、関係性も豊かになっていきます。外部の力を生かすことも必要でしょうが、日常のかかわりの中で自己肯定感を高め、他者、社会へと意識の広がりをつくるのは教師の使命だと私は思います。

だと思えます。生徒の悩みは、家庭の問題など、簡単には他言できないものである場合もしばしばで、だからこそ、生徒の表情を読み取った上で掛ける私たちの一言で、彼らの気持ちや行動が劇的に変わることもあります。面談をして、生徒と一緒に小さな目標を決め、そして次の日、その次の日と少しでも変化があれば褒める……生徒が他者にかかわっていかうとするためには、その土台として学校が生徒にとって安心して生活できる場所になることが必要だと思います。



「生徒に関心を持ち、

日常のかかわりの中でその自己肯定感を高め、他者、社会へと意識の広がりをつくるのは教師の使命」竹歳

要だと思えます。

竹歳 教師が自分を語り、生徒に自分を語らせることがどれくらい生徒を変えるのか、全ての教師がそれを体感しなければいけないと思います。今回のPJで生徒に生まれた変化は、どの生徒にも起こりうるものだと私は思っています。しかし、もしも「特別な生徒が集まったから変化したのだろう」と思っていってしまう先生がいるのなら、ぜひPJの様子などを動画で見ていただきたいです。きっと「普通の生徒がここまで変わるのか」と驚き、自分への刺激になるはずです。そして、自分たちの学校で生徒の変化、成長を促す指導が出来ているのか、そのための校内研修などが行われているか、厳しく見直すことの必要性を感じるはずで。

前田 今回のPJには、学力的には

多様な生徒が参加していましたが、学力や進路が一律ではない生徒同士で学びが生まれていました。いわゆる教科学力において、下位層に位置する生徒たち全員がすぐに今回のような形で「学び」を考えることは難しいかもしれませんが、この実践から考えられることは大いにあると思います。

刈谷 「主体的に学ぶ生徒を育てる」と言いますが、それは「生徒の思いのままにさせる」という意味ではありません。主体的な学びを成立させる場面を設定するのは教師の仕事であり、それは大学でも同じです。今、生徒たちが敏感に感じている閉塞感を崩していくために、理想通りに行かないところは外部の力も借りながら、多様な場面を学校の中につくり出していくことが必要だと思います。